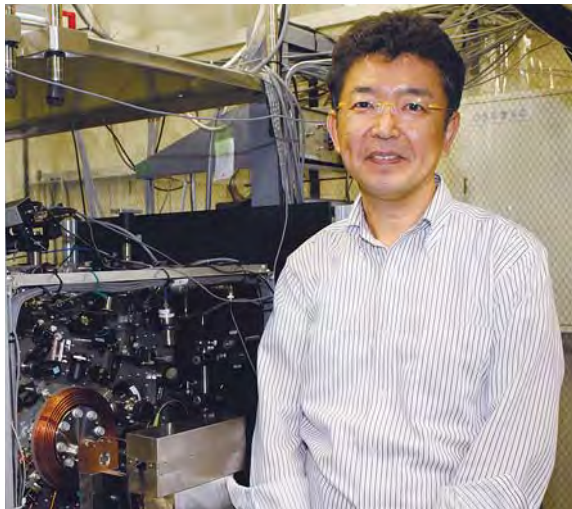


「独り」「仲間と」有意義な時



光格子時計の前で、香取秀俊さん

を隠されたこともある。中学3年から高校1年

までは「小説の時代」。太宰治を中心に国内外の小説を朝から晩まで読んだ。

小説の世界にのめりこみ、数学の難問を夜通し考える。1人であることで満ち足りていた。人から命令されたり教わったりするのは嫌い。自分で

ゴールを探すような仕事がいい、と小説家も考えたが、「あんな過激な生活はできない」と物理の研究者を目指した。東大に入り、博士号取得後、ドイツの研究所へ。そこで命じられた研究はつまらなく感じた。しかし、そこに世界中から訪れる研究者から最先端の情報を聞く中で、光格子時計のアイデアが生まれた。

小学生時代は、組み合わせるとラジオなどが作れる電子ブロックをはじめ電子工作に夢中だった。父親の本棚から古い電子回路図を出してきては眺める毎日。「勉強しなさい」と母親に回路図

「1人で楽しめる時間があったのがよかった。好きな世界を見つけてどっぴりはまってみる」が大事です」

対照的に「仲間とワイワイ楽しんだ」高校、大学時代を過ごしたのは、東京大学教授の西成活裕さん(49、85年卒)。車や人などの渋滞を理論的に研究する「渋滞学」の生みの親だ。

中学までの「勉強ができることを隠さなくてはいけない雰囲気」から、高校では一気に解放された。仲間たちと議論したり勉強を競い合ったり。

「スポーツは体にいいし、モテるかも」と始めたサッカー部はレギュラーになれなかったが卒業まで続けた。毎日の練習の後、ラジオの深夜放送を聞きながら深夜まで勉強した。

アニメ「宇宙戦艦ヤマト」をきっかけに、宇宙に興味を持った。研究者になろうと東大に進むと、非常に優秀な学生たちが集まっていた。政治の話から宇宙の果ての話まで、夜を徹した議論は、今でも研究に役立つている。



「本当に生きている情報は、ネットではなく人からしか得られない。人間関係が大事だ」という西成活裕さん

「今は大学や企業、官公庁などで中心になっている彼らとのつながりが財産です。利害関係のない友達を作れるのが学生時代だと思います」